

『葡萄水』

宮沢賢治

耕平は髪も角刈りで、をとなのくせに、今日は朝から口笛などを吹いてゐます。

畑の方の手があいて、こゝ二三日は、西の野原へ、葡萄<sup>ぶどう</sup>をとりに出られるやうになったからです。

そこで耕平は、うしろのまつ黒戸柵の中から、兵隊の上着を引っぱり出します。

一等卒の上着です。

いつでも野原へ出るときは、きつとこいつを着るのです。

空が光って青いとき、黄いろなすぢの入った兵隊服を着て、手をふって野原に行くのは、誰だっていゝ気持ちです。

耕平だって、もちろんです。大きげんでのっしのつしと、野原を歩いて参ります。

野原の草もいまではよほど硬くなって、茶いろやけむりの穂を出したり、赤い実をむすんだり、中にはいそがしさうに今年のおしまひの小さな花を開いてゐるものもあります。

耕平は二へんも三べんも、大きく息をつきました。

野原の上の空などは、あんまり青くて、光つてうるんで、却<sup>かえ</sup>って気の毒なくらゐです。

その気の毒なそらか、すきとほる風か、それとも

うしろの畑のへりに立って、玉蜀黍<sup>とうもろこし</sup>のやうな赤髪を、ばちやばちやした小さなはだしの子どもか誰か、とにかく斯<sup>か</sup>う歌つてゐます。

「馬こほ、みんな、居なぐなた。

仔<sup>こ</sup>つこ馬<sup>ば</sup>もみんな随<sup>ま</sup>いで行た。

いまであ野原もさあみしんぢや、

草ばどひでりあめばかり。」

実は耕平もこの歌をききました。ききましたから却<sup>かえ</sup>って手を大きく振って、

「ふん、一向さつぱりさみしぐないんぢや。」と云つたのです。

野原はさびしくてもさびしくなくても、とにかく日光は明るくて、野葡萄はよく熟してゐます。そのさまざまな草の中を這って、真っ黒に光って熟してゐます。

そこで耕平は、葡萄をとりはじめました。そして誰でも、野原でべん何かをとりはじめたら、仲々やめはしないものです。ですから耕平もかまはないで置いて、もう大丈夫です。今に晩方また来て見ませう。みなさんもなかなか忙がしいでせうから。

(抜粋)